

国指定重要文化財 遺愛学院（旧遺愛女学校）本館（北海道函館市）の建築と、その保存修理工事の状況について（1）

永井 理恵子

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

北海道函館市にある遺愛学院は1874（明治7）年に開校したミッション・スクールで、爾来、約150年に亘り函館の女子教育および幼児教育をおこなってきた。この学院が所有する本館は1908（明治41）年に竣工した建築で、1997（平成9）年に国重要文化財指定を受け、現在に至るまで110年に亘り使用され続けてきた。大切に使用されてきた校舎であったが、長年の使用による老朽化は避けられず、2018（平成30）年より国宝重要文化財建造物保存修理強化対策事業として文化庁より認定を受け、保存修理工事に着手している。

本稿では、遺愛学院の簡略な概要に続いて本館の意匠および平面計画の特徴を紹介する。その後、特に特徴的な2階会議室（旧講堂）について、その平面計画の空間の意味を読み解く。2階会議室（旧講堂）は、本来は講堂として設計されていたが、1935（昭和10）年の講堂新築により改造がおこなわれ、現在は竣工当時の姿を留めていない。そのため、今回の保存修理工事では、竣工当時の姿に復旧することが試みられている。本稿では、この旧講堂は、竣工当時は講堂といっても単なる講堂ではなくキリスト教会における会堂の設計を意識し、学校における礼拝の場として機能することを目指して設計されたことを読み解いている。

今回の保存修理工事は、大規模な近代日本学校建築の解体復旧工事であり、建築学的にも教育学的にも重要な意味をもつ。この工事が完了する2024（令和6）年まで、その過程を教育学的に分析し公開していく。

【キーワード】 国重要文化財、遺愛学院本館、保存修理工事

I. 問題・目的

本稿は、北海道函館市にある学校法人・遺愛学院が所有する本館（1908年建築・国重要文化財）の成立を振り返るとともに、2018年度より着工した大規模な保存修理工事の経緯とその実際について、本稿執筆時点までに進行した状況を整理・報告することを目的とした事例報告である。

学校法人・遺愛学院は、1874（明治7）年1月、米国メソジスト監督派教会から派遣されたM.C.ハリス（Harris, Merriman Colbert;1846～1921）夫妻が来日した翌日の同月27日から開校した「Day school」（日々学校）をその端緒とし、今日まで絶えることなく女子・幼児教育を実践してきたミッション・スクールである。現在、北海道函館市杉並町に本部および女子高等学校・中学校を置き、函館市元町と西旭岡町に夫々幼稚園を有する。この学院は、ハリス夫人フローラが函館の女子教育に課題を感じて米国メソジスト監督派教会海外婦人伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church）に婦人宣教師の派遣を依頼する手紙を送付したことに応えて協会が派遣した婦人宣教師らによ

て、1878（明治11）年以降、明治期～昭和戦前期においては代々、米国人婦人宣教師らによって教育が牽引されてきた。1882（明治15）年には多額の寄付を得て元町に校舎を竣工して本格的な教育を開始したが、この時に寄付者の氏名を受けて「カロライン・ライト メモリアル・スクール」（Caroline Wright Memorial School）と命名され、東京以北で初の文部省認可による女学校となった。

このような創立の歴史を有する遺愛学院であるが、本稿にて研究の対象とする「遺愛女学校本館」（以後、「遺愛学院本館」とする）は、1908（明治41）年12月に竣工した校舎である。この校舎は、立教大学総長を務めた教育者であるとともに京都聖ヨハネ教会会堂（1907（明治40）年竣工、1964（昭和39）年に明治村に移築、1965（昭和40）年に国重要文化財指定）などの設計で知られるガーディナー（Gardiner, James, McDonald;1857～1925）の設計によるもので、2004（平成16）年に国重要文化財指定を受けているものである。「遺愛学院本館」は、竣工より100年あまりの間、現役校舎として使用され、北国の風雪にも耐えてきた。教職員、生徒、関係者らによって大切に使用・手入れされてきていたが、

経年劣化は避けられず、耐震等の安全性においても課題が生じていた。こうした状況を鑑み、学院では、国宝重要文化財建造物保存修理強化対策事業・近代化遺産等重点保存修理事業要望を文化庁に提出し、文化財建造物保存技術協会（以後「文建協」とする）による現地調査（2017（平成29）年）および文化庁調査官現地指導（同年）による準備を経て内示を得、2018（平成30）年4月に一次交付、6月に二次交付（決定通知）を受理した。これを経て学院では同年6月1日付をもって事業を開始、2018（平成30）年10月より解体工事に着手している。

本稿においては、この「遺愛学院本館」の建築の意匠および構造の特徴を改めて紹介するとともに、保存修理工事の現在状況を示す。本稿を執筆しているのは2019（令和元）年10月であるが、筆者が直近に現地視察したのは同年8月であったため、その時点での現地観察報告が本稿に記述できる最終の状況である。

なお、実際の保存修理事業においては本来、事業費は重要な位置を占めるものであるが、本稿の論述においては具体的な費用については触れないものとする。おおよその出資者負担割合を示すと、総事業費のうち国庫補助が65％、都道府県補助が11.6％、市町村補助が11.6％、事業者負担が11.6％となっている。ただし、本館が使用できない期間の代替校舎として建築が避けられない仮校舎の建設費に関しては一切の補助が出ないため、全て事業者の負担となっている。

II. 方法

文献および、現地観察・聞き取り調査（学院関係者および現場工事監督者等）による。

III. 結果と考察

1. 外観意匠

旧遺愛女学校校舎は、創立より元町の外国人居留地にあった学校が手狭になり、新たに土地を購入して建てられた、明治末期の洋式の校舎である。元町の校地はその後遺愛女学校が所有し今日に至っており、現在は遺愛幼稚園が元町校地に在る。新しく購入した校地は現在の杉並町にあり、ここには現在、中学校と高校が在る。この移転時に、本館のみならず、学校に勤務する宣教師の居宅である宣教師館（通称：ホワイトハウス）、生徒が寄宿する寄宿舎が、ともに新築された。これらの建築のうち寄宿舎は、1970（昭和45）年に老朽化して取り壊されたが、宣教師館と本館はいずれも国重要文化財指定を受けて現存している（宣教師館は2001年、本館は2004年に指定された）。宣教

師館と本館は、国重要文化財指定を受けるより先だって、夫々北海道指定有形文化財（1982（昭和57）年）、国指定有形文化財（1997（平成9）年）に指定されていたが、これら2棟が国重要文化財指定を受けるに至った要因は、2001（平成13）年に本館1階旧応接室の収納庫の床が腐食して抜け落ちたところから建築関係重要書類が発見され、これらの書類によって2棟がガーディナー設計によるものであることが明らかになったことが大きく作用している。

写真1は、竣工当時の本館の姿を撮影したもので、写真2は近年の姿を撮影したものである。

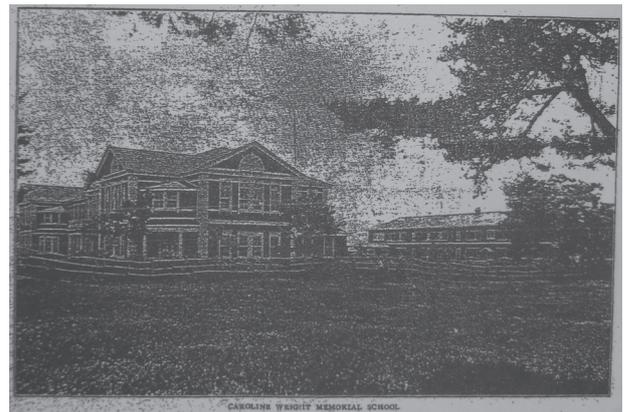


写真1. 遺愛女学校 明治40（1907）年頃¹⁾



写真2. 遺愛学院本館²⁾

宣教師館と本館は、いずれも美しい意匠をもつ洋式建築であるが、住宅である宣教師館と、校舎である本館では、当然のことながら規模に大きな違いがある。敷地の奥まった清閑な場所に位置する宣教師館に対し本館は、杉並町の遺愛学院本部の正門を入って直進すると真正面に存在し、その壮麗な外観は季節の花を咲かせる樹木に彩られ、北国の澄んだ空に美しく映える姿を見せている。

この校舎については主として近代建築関係の先行研究や文献に多くの記載があるが、ここでは本館の意匠、平面計画、設備について、今回の保存修理工事に際して学院がまとめた冊子における簡略な記載を引用する。

まず、この本館の外観の意匠的特徴に関する記載を見てみよう。

「本館は、南北の細長い敷地のほぼ中央に、北を正面に建てられています。木造2階建て、下見板張りの洋館で、桁行52.7メートル、梁間15.5メートルの寄棟造りとし、左右両端に翼部を突出させています。正面中央に古代ローマ建築のトスカナ様式を取り入れた車寄せを設け、頂部に三角形のペディメントを飾ります。翼部の入隅部は4分の1円形半面の下屋を付け、変化に富んだ意匠的な外観を見せています。」³⁾

ここに記載されている各特徴は、いずれも、この時代の洋式建築に多く見られる特徴である。明治初期～中期には、こうした特徴が、いわゆる「擬洋風建築」において、西洋建築に顕著な意匠の模写として多く導入された。「擬洋風建築」においては、建築構造は和式であるにも拘わらず、意匠的には和式に洋式が所々に導入され、なんとも表現しがたい不可思議な姿を見せていたのであるが、明治末期ともなると、構造的にも本格的な洋式が採用され、意匠も洋式を用いた、完全な洋式木造建築が出現するようになった。遺愛女学校本館も、トラス式小屋組を持つ洋式構造であり、また意匠にも完全な洋式が採用されている。上記の引用文に見られる「寄棟造り」「古代ローマ建築のトスカナ様式を取り入れた車寄せ」「三角形のペディメント」などはいずれも、当時の木造公共建築に非常に多く導入されていた。

2. 平面計画と内部意匠

続いて内部の平面計画に関する記述を、同じく上記の冊子から引用しよう。

「内部は、幅の広い中央廊下両側を部屋とし、陽当たりのよい南側に一般教室を、陽当たりの柔らかい北側には図書室や裁縫室を配置し、採光に配慮しています。礼拝や行事の中心となる講堂は、観覧席とステージを結ぶ軸線を45度に振ることで奥行を確保し、細長い校舎の中の限られたスペースにおいて、広大な空間を創出することに成功しています。その天井には、O型リングと鋼棒によるダイバー構造で支えることで舞台前の支柱を無くし、良好な視界を確保しています。さらに北国の建築らしく、当時としては先進的なセントラルヒーティング方式の蒸気暖房設備を備えていました。」⁴⁾

上記の解説内容について若干の補足を加えたい。こ

の校舎の平面計画は、下の2枚の平面図のようになっていた。

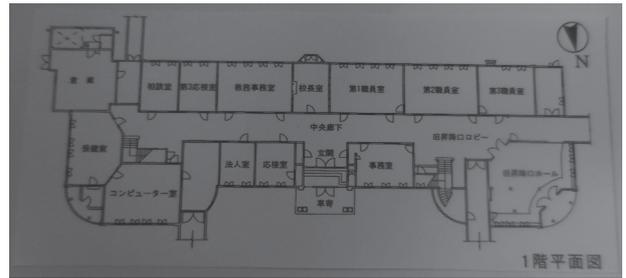


図1. 1階平面図⁵⁾

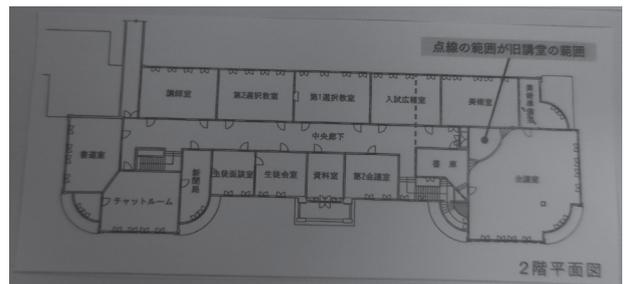


図2. 2階平面図⁶⁾

この校舎は正面玄関を北側中央にもつ、東西に長い校舎である。校舎の南側には、1階には職員室と事務室、2階には通常教室を並べて配置し、北側には生徒や教職員が常駐しない室を配置してある。中央に廊下を持つ、いわゆる中廊下型平面計画の校舎で、この型の場合、廊下の南面に通常教室を配置するのが一般的である。

また、上記解説に「セントラルヒーティング方式の蒸気暖房設備」という一文が見られるが、これは、いわゆる温水を内部に通して暖を取るパネルヒーターのようなものを指す。この校舎の内部には至るところに米国製の大型ラジエータが設置されていた。現在は使用していないが、全て内部意匠として戻す予定であり、修理工事中は取り外して保管している。なお、上記解説には詳細な記述がないが、本館の内部の階段の手摺や階段、扉板、床板は、上質な杉材を用いて造られている。手摺や扉板には美しい洋式の意匠が施され、校舎内部の雰囲気にも重厚感を醸し出す大きな要因となっている。

3. 2階会議室 (旧講堂)

上記の僅かな解説に基づく考察の他にも多くの注目すべき特徴があるのだが、紙幅の関係でこの場では多くを述べるのが難しい。そうしたなかでも、次に述べる点は、今回の保存修理工事において最も注目すべき点の筆頭格に値すると考えられる。以下、この注目すべき点について紹介したい。

本校舎は、長年に亘る使用期間のあいだに、幾度となく様々な手入れがおこなわれてきた。単なる傷みの補修のみならず、生徒数の増加に伴う教室の拡大や、用途の変化による手直しなど、その理由は多種である。教室内に壁面を設けて二分としたり、外壁の塗装の塗り替えに伴い彩色を変更したりといった変更がおこなわれているが、今回の保存修理事業においては、可能な限り、新築当初の原型に戻すことが目標とされている。

さて、今回の保存修理工事で、新築当時の形態から工事によって大きく変更された箇所を本来のかたちに戻す大規模な手入れがおこなわれる箇所として、「旧講堂」の復元が計画されている。これは、校舎北東端部に位置する現「会議室」に当たる箇所である。この室について、先の冊子には、以下のような記述が見られる。

「旧講堂の古図面（1935年頃の青焼き図面の一部）：現在の会議室は、昭和10年の現講堂新築に際して、元々本館にあった講堂を間仕切り、部屋としたものです。古図面や古写真から、会議室、美術室、同準備室、書庫、入試広報室の一部が、1つの大きな講堂となっていたことがわかります。また、南西側にも円形階段があったことがわかっています。今回の保存修理工事では、傷んだ箇所の補修にともない、隠れていた改造の痕跡も調査します。その結果を踏まえて当初の姿を解明し、文化財としての価値の保存と今後の活用を考慮しながら、復旧案を検討することになります。」⁷⁾

以下に、本館2階古図面の旧講堂部分と、旧講堂全景を写す古写真を示す。

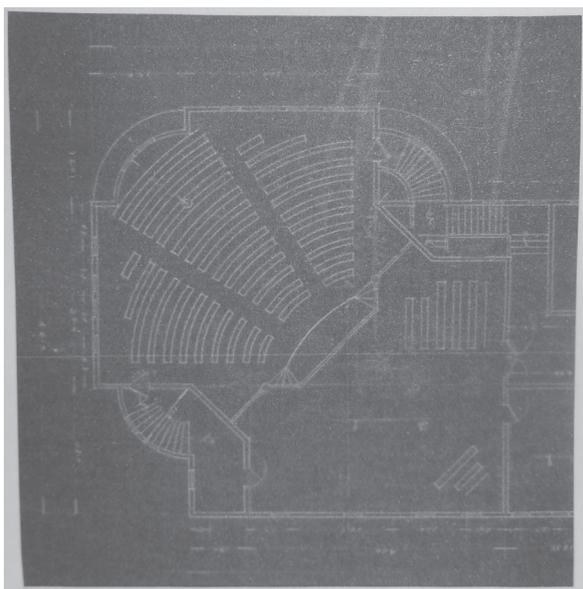


図3. 本館2階平面図（古図面）
（旧講堂部分のみ）⁸⁾

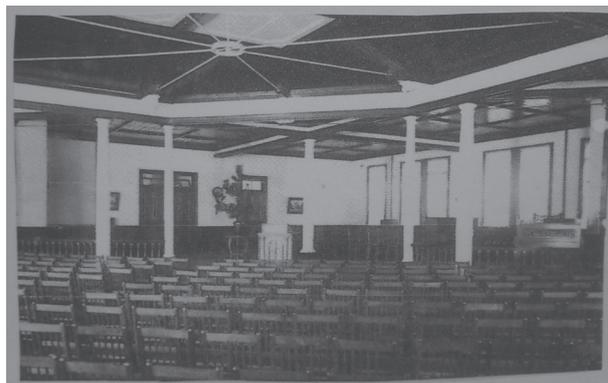


写真3. 旧講堂（古写真）⁹⁾

この「旧講堂」は、本館新築当初、校舎中廊下の東端の突き当りに位置し、北側と南側の両サイドに跨る広い部屋であった。本館東端に、北西に張り出した半円形の窓をもち、室の両端に同型の円形階段を備えていた。講堂内部は床高が二段に分かれており、校舎北側の室は中央柱を持たない空間で、天井は鋼天井となっていた。明治末期ともなると、これだけの大空間を、中央柱を設けずに維持する構造が成立していたことが示されている。一方、講堂は北東から南西に向けて斜めに床段が設けられ、旧講堂の南東も一体の空間が広がって旧講堂を形成していた。旧講堂の北西部と南東部のあいだにはシンプルなオーダーを持つ飾り支柱が4本、設けられていることが確認できるとともに、その中央奥には旧講堂南東部の中央にも飾り支柱を1本、見ることが出来る。写真3を見ると、床段の箇所には木製の柵が設置されていることが確認できる。このことから、旧講堂の北西部と南東部は、空間としては広い視野をもって見渡すことが可能であるが、両者を自由に移動可能な大空間として使用することは計画されていなかったことを示している。

写真3を見ると、室内には椅子が並べられているが、椅子の向きは全て旧講堂の南東端に向かって整然と並べられている。校舎南側にある大きな窓からは陽が射し込み、旧講堂南東の一角を明るく照らしている様子が見られる。写真右端にはオルガンが置かれており、旧講堂が礼拝に活用することを目的として設計されたことを示している。事実、敬虔な伝道者によって創建され運営されていた明治期の本学院の発注に応えて、キリスト教徒であったガーディナーが設計した校舎であることを鑑みれば、この空間が賛美の場として、キリスト教会の会堂を一案として設計されたことは想像にかたくない。このように、会衆が祭壇に向かって集中する形式に着席し、その後方やサイドから採光を図る計画方法は、会堂建築に一般的なものである¹⁰⁾。

勿論、祈りの場としての計画が一番の目的であった

としても、この旧講堂の大空間は、他の用途にも十分に供するものであったと考えられる。北西部は先にも述べたように当時最新の建築構造によって中央柱を設けずに設計された。これにより、この空間の用途は格段に拡大したものと想像される。椅子を取り払えば、様々な活動に用いることができたであろう。また、北西部と南東部の間を中央とし、南東部の椅子の向きを北向きとすれば、北西からと南東からの2方向から中央に向けて着席する形式も採用できたと考えられる。その際には、北東から南西に向けて斜めに設けられた床段が、立体感ある空間を創出し、この旧講堂でおこなわれる諸活動を一そう豊かに演出したものと想像される。

学院は、1935（昭和10）年に、本館の外に別棟を設け、講堂兼礼拝堂を新築した。これにより講堂としての機能を求められなくなったこの室は、生徒数が増加し手狭となった本館を有効に活用すべく、旧講堂北西部のみを講堂として残し、南東部との間を間仕切りによって遮断して、美術室等の小さな室を幾つか設けることになった。この間仕切りを設ける際に、4本+1本の計5本の飾り支柱は半分に縦割り切断され、現在は無残な姿を見せている。

この改築によって、旧講堂がもっていた独自の象徴性は完全に失われ、ただの会議室になり果ててしまった。今回の改修工事では、本来の旧講堂の姿に戻すべく改修計画が進められると考えられる。

4. 保存修理事業に至った状況と全体計画

本建築は、今日まで絶え間なく校舎として継続使用されてきたため、手入れや管理が行き届いているものであった。使用されないまま放置された「空き家建築」ではないうえ、在校生、卒業生らによって大切にされてきた校舎なので、校舎は生き生きとした状態であり、特に内部は清潔が保たれ、美観を維持していた。

とはいえ、日々の活用、寒冷地の暴風と積雪に長年にわたり耐えてきた校舎であるから、全体的な破損や傷みは避けられない。保存修理強化対策事業・近代化遺産等重点保存修理事業要望資料に記された「破損状況及び管理状況」においては、以下のように記されていた。

「全体の弛緩、床および天井の不陸、正面車寄軸部の腐朽（平成26年10月き損届（ママ）提出）、屋根鉄板の劣化、塗装の劣化（剥離・クラック）、建具金具建付け不良、基礎目地モルタルの劣化および脱落、木部の腐朽および蟻害、軒樋の破損および脱落」¹¹⁾

これらの保存修理のため、建築全体の躯体は保存しつつ、構造的な補強をおこなうため内部の床面や壁

面は全て取り外し、構造部分は全て補強工事をおこなう。また、部材については再利用可能なものは全て保存しておき再利用し、強度の点から再利用不可能な部材については取り換えをおこなう方式で保存修理を進める。事業期間は平成30年6月から平成36年（2024年、令和6年）3月（70ヶ月）を予定期間として定めてある。

およその事業スケジュールとしては、概要として整理すると、以下のように予定されている。事業の最初の着手は2018年夏季休暇期間中であった。この間に仮設校舎を新築し、本館の機能を全て移す作業がおこなわれた。仮設建築といっても5年以上も使用する校舎であるから、簡易なものではなく、それ相応の建造物が設計されたが、この仮校舎建築費用の国庫補助は一切ないため、全て学院の負担となっている。その後、解体工事が開始された。全ての部材を外しながら保存庫に移動させ、記録を取りながらの解体作業が進められている。筆者の居住する関東から遠く離れた地であるため、しばしば現状を調査しに向かうことは困難であるが、それでも年に4回程度、解体工事の進行状況を参観している。校舎が建っていた時分には、教職員や生徒らが清掃に励みつつ大切に使用してきた校舎であったので、築100年ものあいだ風雪にも耐え美しく保存され見事であると認識していたが、解体されていく校舎の内部構造を見るにつけ腐朽・損傷は著しく、その状態は凄まじい。この状態でよく使用に耐えていたものだという念を抱かざるをえない。一例として、特に著しい損傷が室内から見ても明らかにわかった応接室物入床下は、根太は朽ち果てて落ち、根太のかかるべき土台そのものも朽ちてなくなっているため、根太が宙に浮いた状態になっていた。床下には、朽ち果てて落ちた部材が散乱し、簡単に言えば床下に何の支えもない状態の床に人や物が乗っていたということになる。この応接室物入は収納庫として活用されてきたが、2001年に、ここの床下を整理していた際に1907年の設計関係資料が段ボール箱に入った状態で発見され、この発見により本館は国重要文化財指定を受けるに足る建築であると認められたのである。そうした意味では重要な場所ではあったわけだが、校舎の北側に位置し、風雪も吹き付けるこの位置は、建築にとって傷みの進みやすい箇所であったと言える。

2019年秋の現在、今なお校舎は調査・解体作業の段階である。この作業は凡そ2020年度夏まで継続される見込みで、その後に組み上げ工事・防災設備工事・施設設備工事がおこなわれ、2023年夏の完成を目指している。

IV. 総括

今回の報告では、遺愛学院（旧遺愛女学校）本館の成立の背景と、保存修理工事における解体（2019年秋現在まで）についての概況をおこなった。

この建築物の解体保存工事は、明治末期の大型木造建築の意匠および構造を詳細に示す重要な資料を提供する貴重な事業である。歴史的資産として建築業界では一定の注目を集める事業であり、この校舎の解体保存修理工事によってまた新たに発見されたり明らかになる日本近代建築の一端が見られる可能性をも秘めた、一大事業でもあろう。

建築物としても大きな価値をもつこの本館であるが、同時にこれは校舎として教育の営みに大きな寄与をもたらしたものに他ならない。この本館に筆者の指導生を連れていった際に学生が発した言葉は、「まるでハリーポッターの物語に出てくる学校のような校舎で育ったら、高校生活そのものも違ったものになったかも知れない。私は今日、初めてこの校舎に入ったけれども、おそらく一生、忘れないほど強く記憶に残る校舎になるだろう」といったものであった。

教育における物的環境の一つとして、子どもの記憶にも残る最大のものが校舎であろう。長きにわたり、多くの生徒の学校生活に彩りを与えてきた本館が美しく蘇る日まで、教育環境を考究する一研究者として、解体保存修理の様子を見守っていきたいと考えるとともに、今回は少しの期間を置いて、この工事の進捗状況を報告し、記録に留めたいと考える。

<追記>

筆者は、2010年度の前期において、半年間の特別研究休暇を取得して函館に滞在し、学校法人遺愛学院遺愛幼稚園に籍を置いて遺愛学院および同学院校舎・園舎に関する研究をおこなった。その後、2014年度より現在まで学院評議員を務めるとともに、2018年度より本館修理委員会委員を務め、遺愛学院本館の保存修理工事事業において学院側から関与している。

【注】

- 1) 米国メソジスト監督派教会婦人伝道協会報告書
1908～1909 所収 青山学院資料センター所蔵
- 2) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 3) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 4) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018

- 5) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 6) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 7) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 8) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 9) 国指定重要文化財遺愛学院（旧遺愛女学校）本館
保存修理工事 案内資料（学）遺愛学院発行 2018
- 10) 現日本キリスト教団田園調布教会会堂も、この計画による。
- 11) 保存修理強化対策事業・近代化遺産等重点保存
修理事業要望資料

【参考文献】

- 七十五周年史編纂委員編集（1960）
遺愛七十五周年史 遺愛女子高等学校
近江栄他（1978）近代建築史概説 彰国社
稲垣栄三（1979）日本の近代建築[その成立過程]
（上・下）（SD選書152, 153）鹿島出版会
小檜山ルイ（1992）アメリカ婦人宣教師 来日の
背景とその影響 東京大学出版会
福島恒雄（2003）北海道キリスト教史
日本キリスト教団出版局
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編（2006）
日本キリスト教史年表[改訂版] 教文館
函館市史編さん委員会編集（2007）函館市史
（年表編）函館市
守部喜雄（2009）日本宣教の夜明け マナブックス
米山勇監修（2010）日本近代建築大全 講談社

The report for conservation repair work project ——School architecture of Iai gakuin (Iai jogakko) main building (Hakodate, Hokkaido) ——

Rieko NAGAI

Teikyo Junior College, Department of Early Childhood Education

【Abstract】

In Hakodate, Hokkaido, in 1874, Iai jogakko was opened by Harris, Merriman Colbert, a missionary sent by the American Methodist Episcopal Church (north). Since 1874, Iai gakuin has been doing girls and child-care education for 150 years. The main building of Iai jogakko was built in 1908 by Gardiner, J.M. and appointed as nationally-important cultural property in 1997. The main building of Iai gakuin is remarkable architecture as modern school building in Japan in that unique design and floor planning.

The main building of Iai gakuin became too antiquated lately. The project of restoration started in 2018. From now on, writer tries to report about this project as a pedagogist in a few works. This paper is the first report about the project.

【Key words】 Nationally-important cultural property, Iai gakuin Main building, Conservation repair work